

文学研究科修士課程 歴史学専攻（2015年度以降 第1学年次入学者適用）

区分	科目名称	単位数	1) 知識			2) 研究技能			3) 独創性		4) 総合力					科目概要（2022年度シラバスより）
			①歴史学の中で専門とする領域について高度な専門的知識を持っている	②専門領域以外で、近接する分野の各関連領域に関する高度な知識と、専門領域に関わる学際的知識を持っている	③研究遂行の基礎となる文献を読解するために必要な語学力がある	④研究遂行に必要な資料収集・分析能力をもっている	⑤研究成果を学界・社会に対して発信することができる	①歴史学の中で専門とする領域の研究状況を正しく把握した上で、当該研究の目的・意義を正確に位置づけることができる	②歴史学の中で専門とする領域を研究するとき、関連する学際分野に関する豊富な知識を持ち、無自覚あるいは独創的な研究方法に基づいて遂行できる	高度専門職業人コース		研究者コース				
										①当該研究を、専門領域だけでなく近接する関連領域や学際的領域における広範な知識を応用して遂行できる	②研究の成果を一定水準に到達した内容を持つ課題研究としてまとめることができる	③研究を通して修得した高度な専門的知識や技能をさまざまな社会的活動に活用し、また社会活動から修得した知識や技能を研究に活かすことができる	④当該研究を、専門領域だけでなく、近接する関連領域の研究状況や研究成果と照らし合わせた上で、独創的に遂行できる	⑤研究の成果を一定水準に到達した研究として、修士論文としてまとめる総合的な能力を備えている	⑥研究の過程で修得した歴史学に関する広汎な高度な専門的知識や技能を基礎に、創造的な知識を切り開き、それを学界や社会に対して発信できる	
基礎科目	歴史学研究基礎1	2	◎				○		△							本講義では、歴史学研究の基本的な事項および研究方法の基礎的事項をふりかえるなかで、歴史学に対する自らの考えや研究方法を模索することをねらいとする。本講義が対象とする事項は、1) 歴史学および関連語学の研究対象とその特徴2) 研究テーマの移り変わりや学問的・社会的背景3) 歴史学研究の意義と社会的使命以上3点を中心とするが、実際の講義では、各事項の下に課題（小テーマ）を設け、小テーマについての講義と受講生のまとめおよび議論を繰り返しながら理解を深め、高度かつ専門的な歴史学研究に携わる者の基礎的な知識の涵養をめざす。
	歴史学研究基礎2	2	◎				○		△							本科目は、歴史学研究基礎1の学習を基礎としながら、歴史学の研究動向および研究の現状を検討し、歴史学が担っている学問的・社会的な役割を理解することをねらいとする。特に、文献史学のみならず「モノ（事物）」を資料として用いる歴史文化研究についても検討することにより、歴史学はもとより人文科学全般に及ぶ学際的な枠組みを理解し、近接分野の手法や議論についても理解を深めたい。なお、実際の講義は1) 歴史学の研究動向と研究の現状2) 歴史学と関連語学3) 研究法の進化と研究の進展以上の3点とし、各事項の下に課題（小テーマ）を設け、小テーマについての講義と受講生のまとめをもとにした議論を繰り返して理解を深める。
	基礎外国語文献研究	2			◎				○							英語圏で発表されたテキストを輪読する。本演習では、辞書を引きながら英語テキストを丁寧に読み、基本的な読解力を身につけるとともに、自身の研究を英語で表現する場合にはどのような表現が適切なかを考える姿勢を身につける。
	基礎文献研究	2				◎			△							歴史学研究において、文字史料の活用は不可欠である。なかでも日本前近代の政治・社会・文化・思想を知るためには、古記録を正確に読解する必要がある。本科目は、日本の中世（平安後期から戦国期までの約五百年間）における日記や歴史書を取り上げ、史料に基づいた歴史研究の方法や中世社会の諸相を学ぶとともに、古記録という史料の特徴および個々の古記録の内容的特徴を検討するとともに、歴史学研究においてどのような点に留意して利用すべきかを考える。
専攻科目	歴史学史料演習1	2				◎			△		○		○			①『再夢記事』などの史料を正確に読解する。②『大日本維新史料稿本』を利用して①の歴史的意義を明らかにする。③先行研究との比較を通じて、①の研究上の意義を明らかにする。
	歴史学史料演習2	2				◎			△		○		○			①『再夢記事』などの史料を正確に読解する。②『大日本維新史料稿本』を利用して①の歴史的意義を明らかにする。③先行研究との比較を通じて、①の研究上の意義を明らかにする。
	歴史文化資料演習1	2				◎			△		○		○			歴史文化研究は複数の領域にまたがるため資料が幅広く、多様多岐である。それらについて資料論の体系化を目指す努力も続いているが、個別領域における議論にとどまっているのが現状である。とはいえ、その中から資料の多様性や個別領域の範囲を超えた資料の特性や資料化をめぐる問題点が徐々に見え始めている。そこで、この授業では現在までの資料論的な議論を紹介しつつ、資料や領域の個性を超えた資料の特性や資料化の問題に焦点を当てたい。前半は資料論的な議論の概要紹介と意見交換によって授業を進め、後半は前半の授業内容をふまえて受講生による資料の解説と意見交換を行い、最後に授業を通しての成果と課題について報告してもらう。
	歴史文化資料演習2	2				◎			△		○		○			修論、博論の執筆にむけて、それぞれ受講生の研究テーマを深める。①先行研究の整理。ただ羅列ではなく、研究史のなかでの自己の研究テーマの位置づけが明確になるように検証する。②研究テーマを論ずるための基本資料の調査。解説。資料の解説においても、今まで、どのように読まれてきたのか、どこに読み方の問題点があるのかなどを考えることが重要。③研究発表とともに、それについて質疑・討論を重視する。他者の研究を対象化することで、自分の研究も深められる。
	歴史学特殊研究1	2				◎			△		○		○			研究の前提となる、先行研究の批判的検討と、史料（文献史料・出土資料など）の分析（史料批判）に基づく歴史像の復元について、受講生とともに考える。
	歴史学特殊研究2	2				◎			△		○		○			本授業では、近世都市京都を取り巻いていた「御土居」について、特に近世中期以降の変遷、恒常的な利用に注目して検討する。豊臣秀吉によって造成された「御土居」が、17世紀半ば以降、特にその東側が取り壊され、市街地へ発展していったことはよく知られている。一方で、取り壊されなかった地域の御土居が、江戸時代を通じてどのように利用されていたかは、十分に明らかになっているとはいえない。角倉家による御土居敷の支配やその払い下げ、また預かり地の年貢収納などについて考察する。
	歴史学特殊研究3	2				◎			△		○		○			この授業は、歴史学を専攻する大学院生が、専門分野が日本史・東洋史・西洋史のいずれであっても理解しておかねばならない研究上の根本問題や手続きについて、おもに担当教員の専攻分野の研究の最前線を踏まえながらわかりやすく解説するものである。単に講義だけでなく、問題設定や研究把握、分析視角や史料の利用方法に関わる重要点を学ぶため、日本人研究者の執筆した論文などを読み、実践的・体系的に学ぶことをめざすものである。
	歴史文化特殊研究1	2				◎			△		○		○			井上正『岩波 日本美術の流れ2 7-9世紀の美術』は、彫刻・絵画・工芸といったジャンルやインド・中国・朝鮮半島・日本といった地域に細分化されざる傾向のあった従来の美術史研究の枠を離れ、実際の作品に即しながらも広くアジア的視野に立って造形芸術の流れを追い、作品成立の謎を解き明かした名著です。本授業では、このテキストを輪読し、深い作品観察より導き出された新視点からの造形作品の読み解き方を獲得することを目指します。また、そこから一歩進んで、自らの視点、感性で造形作品の「かたち」をきちんと把握し、その意味を位置付ける基礎力を獲得することを試みます。
	歴史文化特殊研究2	2				◎			△		○		○			6世紀初頭に即位したとされる継体大王、『古事記』・『日本書紀』などに足跡が記されるが、その人物像や即位の経緯については諸説紛々たる状況で、謎多き人物として知られている。やはり文献史料だけでは限界があり、古墳や特微的な遺物など考古学の成果が期待されている。特に、継体陵とされる今城塚古墳は発掘調査がなされ、同じ形態をとる古墳の展開から継体朝との政治的つながりが指摘できる。倭の五王の時代（5世紀）との違いなど、今後ますます考古学と文献史学との協業が必要となる。この授業では継体大王について文献史料・金石文から考え、古墳などの考古資料の分析を踏まえたうえで、5～6世紀の政治体制について明らかにする。
	歴史文化特殊研究3	2				◎			△		○		○			①世界の民俗学にはどのような理論があるのか、②日本も含む世界の民俗学は今日までどのような学史的展開を見てきたのか、③現代民俗学にはいかなる理論的可能性があるのか、④民俗学と文化人類学・社会学との関係をどのように理解すればよいのか、の4点について講義する。
専門科目	歴史学特別演習1	1				◎			△		○		○			「歴史学特別演習174」は、一連の科目として設けられた、博士後期課程進学希望者に対する修士論文作成のための基礎演習である。リサーチワークとしての個別研究を対象に、その概要・構成・研究計画などの検討を行う。いずれの段階においても、専門分野を同じくする教員・大学院生との精査や議論が積み重ねられることによって、個人研究のレベル向上をめざす。本科目ではその第1段階として、十分な学説理解を前提に、専門分野の研究水準や動向を調査し、修士論文の問題設定を行うことに重点を置く。その上で、修士論文完成に至るまでの実質的な研究計画策定を行う。
	歴史学特別演習2	1				◎			△		○		○			「歴史学特別演習174」は、一連の科目として設けられた、博士後期課程進学希望者に対する修士論文作成のための基礎演習である。リサーチワークとしての個別研究を対象に、その概要・構成・研究計画などの検討を行う。いずれの段階においても、専門分野を同じくする教員・大学院生との精査や議論が積み重ねられることによって、個人研究のレベル向上をめざす。本科目は、「歴史学特別演習174」の第2段階として、設定した問題を明らかにするためのフィールド（研究対象）や、その際に必要となる史料について調査・分析を行うことに主眼を置く。その成果を研究動向に照らし、問題設定の再検討を行い、次年度に向けて研究計画の修正を行う。

区分	科目名称	単位数	1) 知識		2) 研究技能			3) 独創性		4) 総合力							
			①歴史学の中で専門とする領域について高度な専門的知識を持っている	②専門領域以外で、近隣する分野の各関連領域に関する高度な知識と、専門領域に関わる学際的知識を持っている	①研究遂行の基礎となる文献を読解するために必要な語学力がある	②研究遂行に必要な資料収集・分析能力を持っている	③研究成果を学界・社会に対して発信することができる	①歴史学の中で専門とする領域の研究状況を正しく把握した上で、当該研究の目的・意義を正確に位置づけることができる	②歴史学の中で専門とする領域を研究するとき、関連する学際分野に関する豊富な知識を持ち、独自の研究方法に基づいて遂行できる	①当該研究を、専門領域だけでなく、近隣する領域や学際分野の知識や技能をさまざまな社会的活動に活用し、また社会活動から得た知識や技能を研究に活かすことができる	②研究の成果を一定水準に到達した内容を広域で高度な専門的知識や技能をさまざまな社会的活動に活用し、また社会活動から得た知識や技能を研究に活かすことができる	高度専門職業人コース			研究者コース		
												①当該研究を、専門領域だけでなく、近隣する領域や学際分野の知識や技能をさまざまな社会的活動に活用し、また社会活動から得た知識や技能を研究に活かすことができる	②研究の成果を一定水準に到達した内容を広域で高度な専門的知識や技能をさまざまな社会的活動に活用し、また社会活動から得た知識や技能を研究に活かすことができる	③研究の過程で得た知識や技能を基礎に、創造的な知見を切り開き、それを学界や社会に対して発信できる	①当該研究を、専門領域だけでなく、近隣する領域や学際分野の知識や技能をさまざまな社会的活動に活用し、また社会活動から得た知識や技能を研究に活かすことができる	②研究の成果を一定水準に到達した内容を広域で高度な専門的知識や技能をさまざまな社会的活動に活用し、また社会活動から得た知識や技能を研究に活かすことができる	③研究の過程で得た知識や技能を基礎に、創造的な知見を切り開き、それを学界や社会に対して発信できる
専攻科目	専門科目	歴史学特別演習 3	1	○				◎							○	「歴史学特別演習1~4」は、一連の科目として設けられた、博士後期課程進学希望者に対する修士論文作成のための基礎演習である。リサーチワークとしての個別研究を対象に、その概要・構成・研究計画などの検討を行う。いずれの段階においても、専門分野を同じくする教員・大学院生同士の精査や議論が積み重ねられることによって、個人研究のレベル向上をめざす。本科目は、「歴史学特別演習1~4」の第3段階として、先に修正した研究計画にしたがい実施された調査や分析作業などの基礎作業の整理を行い、修士論文の構成原案を検討するとともに、史資料やフィールドについて追加調査・蒐集作業を明確化することに主眼を置く。	
		歴史学特別演習 4	1	○				◎							○	「歴史学特別演習1~4」は、一連の科目として設けられた、博士後期課程進学希望者に対する修士論文作成のための基礎演習であり、リサーチワークとしての個別研究を対象に、その概要・構成・研究計画などの検討を行う。いずれの段階においても、専門分野を同じくする教員・大学院生同士の精査や議論が積み重ねられることによって、個人研究のレベル向上をめざす。本科目は「歴史学特別演習1~4」の最終段階として、これまでに設定してきた論文構成案にしたがって執筆された草稿を検討する。また、演習での議論を通じて、問題点の明確化と論文構成のブラッシュアップを行い、充実した修士論文の完成を目指す。	
	研究指導科目	歴史学研究指導演習 1	1	○					◎						○	大学院における学修は、自らが設定した課題にしたがって研究を進める能力を養うことを目的の一つとしているが、そのなかには、継続的な鍛錬の場を必要とする「研究の発信力」「公正性・客観性を精査し確保する力」も含まれる。そのため「歴史学研究指導演習1~4」は、一連の科目として、修士論文の作成に向けて、指導教員以外にも研究分野を異にする複数の教員が、多角的な視点から意見を述べるとともに、受講者間で研究の位置づけや分析方法などについて積極的に討議を行う。本科目は「歴史学研究指導演習1~4」の第2段階として、研究課題に相応しい史資料やフィールドについての調査・研究をもとに研究報告を行う。複数の教員や他の院生との議論を繰り返すことで、分析や考察が客観的かつ論理的に行えているかを確認し、残る課題を明確化することに主眼を置く。	
		歴史学研究指導演習 2	1	○					◎						○	大学院における学修は、自らが設定した課題にしたがって研究を進める能力を養うことを目的の一つとしているが、そのなかには、継続的な鍛錬の場を必要とする「研究の発信力」「公正性・客観性を精査し確保する力」も含まれる。そのため「歴史学研究指導演習1~4」は、一連の科目として、修士論文の作成に向けて、指導教員以外にも研究分野を異にする複数の教員が、多角的な視点から意見を述べるとともに、受講者間で研究の位置づけや分析方法などについて積極的に討議を行う。本科目は「歴史学研究指導演習1~4」の第2段階として、研究課題に相応しい史資料やフィールドについての調査・研究をもとに研究報告を行う。複数の教員や他の院生との議論を繰り返すことで、分析や考察が客観的かつ論理的に行えているかを確認し、残る課題を明確化することに主眼を置く。	
		歴史学研究指導演習 3	1	○					◎						○	大学院における学修は、自らが設定した課題にしたがって研究を進める能力を養うことを目的の一つとしているが、そのなかには、継続的な鍛錬の場を必要とする「研究の発信力」「公正性・客観性を精査し確保する力」も含まれる。そのため「歴史学研究指導演習1~4」は、一連の科目として、修士論文の作成に向けて、指導教員以外にも研究分野を異にする複数の教員が、多角的な視点から意見を述べるとともに、受講者間で研究の位置づけや分析方法などについて積極的に討議を行う。本科目は「歴史学研究指導演習1~4」の第3段階として、残された課題を踏まえ、さらに史資料やフィールドについての調査・研究を行い、それらをもとに研究報告を行う。引き続き、複数の教員や他の院生との議論を繰り返すことで、分析や考察が客観的かつ論理的に行えているかを確認するが、加えて、論文の仮構成も提示することにより、論文執筆に向けての課題を明確化する。	
		歴史学研究指導演習 4	1	○					◎						○	大学院における学修は、自らが設定した課題にしたがって研究を進める能力を養うことを目的の一つとしているが、そのなかには、継続的な鍛錬の場を必要とする「研究の発信力」「公正性・客観性を精査し確保する力」も含まれる。そのため「歴史学研究指導演習1~4」は、一連の科目として、修士論文の作成に向けて、指導教員以外にも研究分野を異にする複数の教員が、多角的な視点から意見を述べるとともに、受講者間で研究の位置づけや分析方法などについて積極的に討議を行う。本科目は「歴史学研究指導演習1~4」の最終段階として、明確化された課題を踏まえ、論文の構成を再検討し、修士論文の最終構成案によって研究発表を行う。複数の教員や他の院生との議論を繰り返すことで、論文完成に向けての問題点を明確化する。	
	関連科目	歴史学フィールドワーク	2		○				◎						○	歴史に関わる地域研究において、フィールドワークがどのように有効か、また時にどのような弊害を生むのかを学ぶ。その後、調査対象地を具体的に設定した入念な準備を行った上で、実際にフィールドワークを体験し、その成果を報告書にまとめる作業を行う。	
		外国語文献研究	2		○				◎						○	近現代イギリスの文化史に関連した専門書・研究書を分担を決めて会読し、そこで注目されているテーマや論点について理解する。本演習では、英語の逐語訳を通じた読解能力の向上とともに、背景となる歴史の知識や専門用語の調べ方など、英語文献を読む際に必要な技術についても説明する。必要が認められる場合には、当該文献に関する基本的な知識を講義で補う。なお、受講生の数などに応じて、授業の進め方は適宜変更することもある。	
		フィールドワーク研究	2		○				◎						○	主として文化人類学におけるエスノグラフィ(ethnography)的方法論を軸に、歴史学、歴史文化研究を行う際にも、必要と思われるフィールドワークに関する知識、技術、地域や文化を描くための視点に関し学修する。文化人類学では、一定のコミュニティを対象としたフィールドワークから、社会集団やモノの流通、技術、身体技法、言説分析などさまざまな対象をもとにフィールドワークは行われている。これらは、歴史学における文化、社会分析を行う際に、重要な基礎的要素を多く含んでいる。本講義では、エスノグラフィ的視点とは何かについて学ぶとともに、各自が実施したフィールドワークのデータ(フィールドワークを行わない人は、担当の文献)等をもとに、データの収集法、まとめ方、論文を執筆する方法についても検討する。また、フィールドワークと倫理・公共性の問題、コロナ禍のフィールドワークの方法なども検討、討議していく。	
		歴史情報と社会	2		◎			○	○						○	私たちの身の回りにはさまざまなかたちで歴史情報があふれている。かつて歴史研究の専門家や歴史に造語の深い知識人たちによって、文字を主な媒介として発せられていた歴史情報が、今や博物館や資料館・文書館、自治体などの機関にとどまらず、歴史に興味をもつ個人さえも、文字だけでなく画像・映像などを駆使して歴史情報を発信する時代になっている。そうした時代の中で、歴史研究に関わる私たちは、学界以外の場所でも情報の発信者になることも少なくないが、歴史情報の発信者を忘れて情報を発信しがちである。しかし、歴史情報は、発信者と受信者、両者を媒介するメディアがあって情報として流通している。受信者が発信者にもなる現代において、発信者と受信者との情報のキャッチボールはどのようにすればより円滑に進むのだろうか。こうした問題意識に立って、この授業では受信者を視野に入れた歴史情報のあり方について考えていきたい。	
歴史情報基礎論		2		○			◎	○						○	アカデミズムとしての歴史学とその成果は、研究職以外の市民にとっては、時としてハードルが高い。それだけが理由ではないが、実証的な研究では否定されている、いわゆる「トンデモ説」が、WE B上や書籍などで、事実のように語られ、それが史実として通説になっていることも多い。歴史学を取り巻く現状の中で、歴史研究の成果をどうすれば活かせるのか、歴史のおもしろさと有用性を広く伝えるには何が必要なのだろうか。そもそも、研究成果を活かすとはどういうことなのだろうか。なぜ、その成果が一般に浸透しないのだろうか。自治体史や行政調査報告書、博物館とその展示などを通して、歴史情報と歴史学の今と課題を考えていきたい。		
歴史情報資源論	2		○			◎	○						○	民俗学が対象とする資料、すなわち「民俗資料」について、さまざまな具体事例を元に考えたい。民俗資料に対する過去の学説から現代にいたるまでの変遷、また現代社会に中々いかなるものが民俗資料になりうるか。広義の視座から考える。さらに、民俗資料と歴史資料との共通性や異質性についても取り上げたいと思う。			